

# 10周年記念事業

本連盟は、2005年に開催されたスペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野を契機に、その財産を継承し、年齢や性別、障がいの有無に関わらず、また、それぞれの体力や技能レベルに応じて、すべての人が楽しめるユニバーサルスポーツであるフロアホッケーの普及・交流を通して、インクルージョンの社会を創り出すことを目的として設立されました。

知的障がい者のスポーツとして始まった競技が、すべての人から愛されるユニバーサルスポーツとして発展することは、世界のスポーツ史上、他に類をみない、大変意義深いことと考えております。

連盟設立以来、お互いの違いを認め合い、「誰もが大切な存在である」と気付くことができるフロアホッケーを全国各地に広げ、絆が失われつつある地域社会が笑顔あふれる社会になるよう、活動を続けてまいりました。当連盟も設立から10年の節目を迎えることができ、設立10周年を記念いたしまして、長野市において平成27年12月18日「感謝の夕べ」、19日に「記念シンポジウム」などのイベントを行いました。

○関連記事 信濃毎日新聞(34面) 2015年(平成27年) 12月20日(日)

## SO10年 障害者も共に

フロアホッケー連盟 長野でシンポ



SO長野と日本フロアホッケー連盟の設立から10周年を記念したシンポジウム＝19日、長野市のJ Aアクティホール



会場には長野の大会の写真などが展示され、ボランティアらが当時は振り返っていた

### 世界大会開催で支える機運

NPPO法人日本フロアホッケー連盟(細川佳代子理事長、事務局・長野市)は19日、2005年に県内で開いたスペシャルオリンピックス(SO)冬季世界大会・長野と同連盟設立から10周年を記念したシンポジウム(信濃毎日新聞社、信毎文化情報財団共催)を、長野市のJ Aアクティホールで開いた。細川理事長(阿部守一知事らが「SO世界大会から10年」社会は大きく変わったか、めざすべき社会)をテーマに討論し、約250人が開いた。

討論には、知的障害者の雇用に力を入れている広島県の食品メーカー「エフビコ」の佐藤守正社長、来年2月に新潟県で開くSO日本冬季ナショナルゲーム・新潟の実行「次のステップにしたい」と

「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

委員会の久保田博事務局長も参加。増田正昭・信濃毎日新聞編集委員がコーディネーターを務めた。05年の大会には、84カ国・地域から知的障害のある選手やコーチらが出場した。阿部知事は、大会を機に「県民全体が障害者をみんなで支えていこう」という機運が盛り上がった」と指摘。久保田事務局長は「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

「長野で開いたSO世界大会」が振り返りつつあるとし、開きを迎える新潟県での大会を「次のステップにしたい」と

## SO冬季世界大会 県内開催10周年シンポの詳細

2005年のスペシャルオリンピックス(SO)冬季世界大会の県内開催とNPO法人日本フロアホッケー連盟(事務局・長野市)設立の10周年を記念するシンポジウムは19日、長野市で開いた。同連盟が主催し、信濃毎日新聞社と信毎文化事業財団が共催。信州で世界大会を開いた意義や目指すべき社会の在り方などについて、同連盟理事長の細川佳代子さん、知事の阿部守一さん、知的障害者雇用に力を入れる食品トレー製造エフピコ社長(広島県)の佐藤守正さん、来年2月に新潟県で開くSO日本冬季ナショナルゲーム・新潟の実行委員会事務局長の久保田健さんが意見を交わした。(同会は信濃毎日新聞編集委員・増田正昭)

# SO大会の意義 今後の在り方は

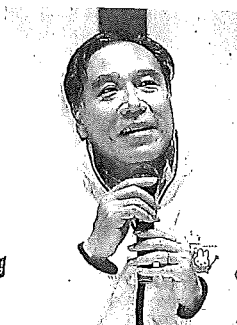
—SO冬季世界大会の県内開催何が変わったか。  
阿部 県民全体で障害者をみんな支えていくという意識が盛り上がった。地域医療や就労支援、相談体制の充実を加速させるきっかけになった。  
佐藤 現在370人の障害者を雇用している。細川さんの出会いを機に会社フロアホッケーも始め、障害者スポーツすることが普通になった。  
久保田 長野県でSOが開催されたから、新潟県も追い付こうと努力して開けることになった。住みよい地域、社会づくりに力を注いでいるようになった。  
細川 先日、新潟県南魚沼市の総合支援学校(特別支援学校)を視察した。学校が子どもを街に連れ出して住民と触れ合わせ、住民みんな声を掛けて応援している。私の理想の学校があった。—目指すべき社会へやるべきことは何か。  
細川 知事や市町村長と手と(障害者)支援への姿勢が分かっています。(自派は)先延ばししたが、最終決断が速い。日本のモデルになってほしい。  
佐藤 いつも考えの「福祉」「産業」という二面。私たちが「知的障害者の就労」事業としてやっている。障害者は生産性を高めるという目標を持って働くべきだと思います。「生産性」という言葉を福祉関係者からは嫌われるかも知れませんが、やってみて分かってもらおうと思っています。  
—地域の雇用はどのように進んでいるか。  
阿部 障害者の能力が過小評

### 細川さん 長野が日本のモデルに

### 佐藤さん 生産性という目標持ち



日本フロアホッケー連盟 理事長 細川佳代子さん



県知事 阿部守一さん



エフピコ社長 佐藤守正さん



SO日本冬季ナショナルゲーム・新潟実行委員会 事務局長 久保田健さん

### 社会の環境づくり必要 阿部さん

### 新潟でも次々と関わり 久保田さん

—教育が担う役割。  
久保田 特別支援学校の進路指導を10年以上やっている。障害者の離れる原因は職場の人間関係が多い。障害者の関わり方を(企業に)伝えることも必要だ。新卒では障害者の家族や教育関係者サポートし、企業も雇用のノウハウを共有するネットワークが広がっている。  
—シンポジウムの議論を踏まえたい提言。  
久保田 新潟県民のSOを知らない人が多かった。今回の大会をきっかけに次々と関わりを持っていく。大会後もつながりを離さず、生かせるようにしたい。  
佐藤 フロアホッケーもSOがなければ日本に入らなかった。ただ、フロアホッケーを通じてインクルーシブな社会を築いていくべきだと、社会包摂を公共社会の経営者へ目指したい。  
阿部 手話通訳者制度を農業就労の促進、特別支援学校の教員増強(人材)にも(障害者)社会活躍できる環境づくりが必要。皆さんがキャラクターホルしなから希望を持って働ける環境を取り組む。  
細川 今日のシンポジウムに参加し皆さんの意見を聞いて、SO冬季世界大会を開催したての(間違った)ことを確認した。どこまでも思っ(敬称略)

### 職場体験で自信／フロアホッケーのおかげで

—シンポの会場から  
体言の練習を避けながら障害者のあそびに参加できるようになった。その後、特別支援学校を5のあそび場たちも交流した。最初昇り、会場から積極的発言は障害者の皆さんの役に立ちたいという声が上がった。  
長野市の障害者福団体の男性(障害者)が地域で働くようになった。気づけの店舗(仕事を体験する)フレたはホッケーのおかげだ。  
1回1時間、半日たり、社会福祉法人代表の女性、私たパーでバック詰めをする。ちの施設を利用する障害者90人と、地域の事業者で仕事を体験する。学校で授業めな子も、地域の施設で働くことができた。職場の人に認められて笑顔。県内障害者の月平均工賃を浮かせる。県社会に近しい形は1万4,000円(2014年で自信を深め、経験を積むこと)ができた。  
長野市の中学校教諭の女性  
SOでフロアホッケーに出合、赴任先の小学校で始めた。  
—